

今もう一度、17期生として

第19期大学院生 森 直也
(第17期OB)

大学院生になった私の日常には、埋めようのない空白があった。小野先生や高橋先生の下での研究発表。研究を通じて菊森先生や竹内先生とも交流を持つことができたし、マーケティング・ジャーナルに論文投稿もさせていただいた。ゼミに顔を出せば、慕ってくれる後輩の姿もある。一見、学部時代と何も変わっていないようで、むしろ充実した日々。でも空白は確かに存在していた。それは、たった2人の大切な17期生の同期、舞香ちゃんと実咲がゼミを卒業し、社会人として旅立っていったことによるものに他ならない。

私が最初にその違和感に気づいたのは、現3年生の19期生を迎え入れたゼミ面接だった。1年前、同じ場所でゼミの未来を共に想像し、熱く議論を交わしていた2人はもうそこにはいなかった。私は、初めて2人のいないゼミを経験した。4月に入り本格的にゼミが始まると、違和感は核心に変わった。ディベートを始め、現役生の活動に対して助言を求められるのは1年前と変わらないが、そこで私に求められたのは大学院生としての意見だ。17期生として3人で順番に発言していたあの頃が遠い昔のように感じられた。そうして、いつしか私自身も17期生としてではなく、大学院生としての自分が変わっていったのだ。

しかし、私は決して1人ではなかった。それを教えてくれたのは研究だ。なんとも大学院生らしい、そう思ったに違いない。ただ、私にとっての研究は一般的な大学院生のそれとは違う。なぜなら私の研究は、17期生の三田祭論文として2人と共に生まれたものだからだ。それだけではない。韓国の学会で最優秀賞を受賞した喜びも、11人ものかつての仲間がゼミを退会した苦しさも、全てを乗せている。思えば、当時の私は大量退会というゼミ存続の危機にあまりに無力だった。入ゼミ代表としてまさにゼミを次に繋ぐために尽力した実咲。そして、ゼミを守りたい一心で引き受けてくれたゼミ長の役目を立派に果たし、今の温かいゼミを形作った舞香ちゃん。私にできたのは2人の手助けに過ぎない。気づけば、私の中では、空白なんて瑣末な感情は消え、もう一度17期生としてゼミに貢献したいという思いに火が灯っていた。

言うまでもなく、17期生の最大の貢献は、舞香ちゃんが残したゼミの温かさだ。どんなに忙しく辛くても、先輩と後輩が密接に支え合い、共に活動する仲間や小野先生に対する感謝と思いやりを忘れずに活動できるゼミを彼女は実現させた。では、私は何をゼミに残せるだろうか。その答えは、かつて彼女がくれた、学術的な部分でゼミを支えてほしいという言葉にあった。私は、三田祭論文として生まれた研究を、卒業論文、レビュー論文、そして修士論文へと発展させ続けることで、初めは小さな関心も諦めずに考え、仲間と議論を積み重ねれば、必ず大きな実を結ぶと未来の後輩に勇気を与えたい。そして、そんな実りのある研究に着手した代こそが17期生だと示したい。ゼミを守り、変えた彼女の功績が大量退会という過去で塗り替えられてしまわぬように。これは他の誰でもない、私にしかできないことなのだから。